為惡也說諸侯

假惡人殺人者即惡人也假盜夫

犯他事者即盜夫也是為惡也假

實情却犯形淫甚者也故人為惡也

危惡微詰說而諭童蒙為飭善

懲悪之一助実徒看則架塗空真具
唯知閑隙家春鄙警梓音寫夫男女交合
之道者人倫之大本而樂不淫怒不傷
也然ノ則後学之徒是莫忽爾云
戊辰之春　怡枕樓主人題

上之巻

いせ源氏物語

中之巻

雲源氏物語

上之巻

雅藻

中之巻

おらひやたのこちんぐさ

蘭かたらぐさ

下之巻

かるひるの妻ぐさ

甘露の物語

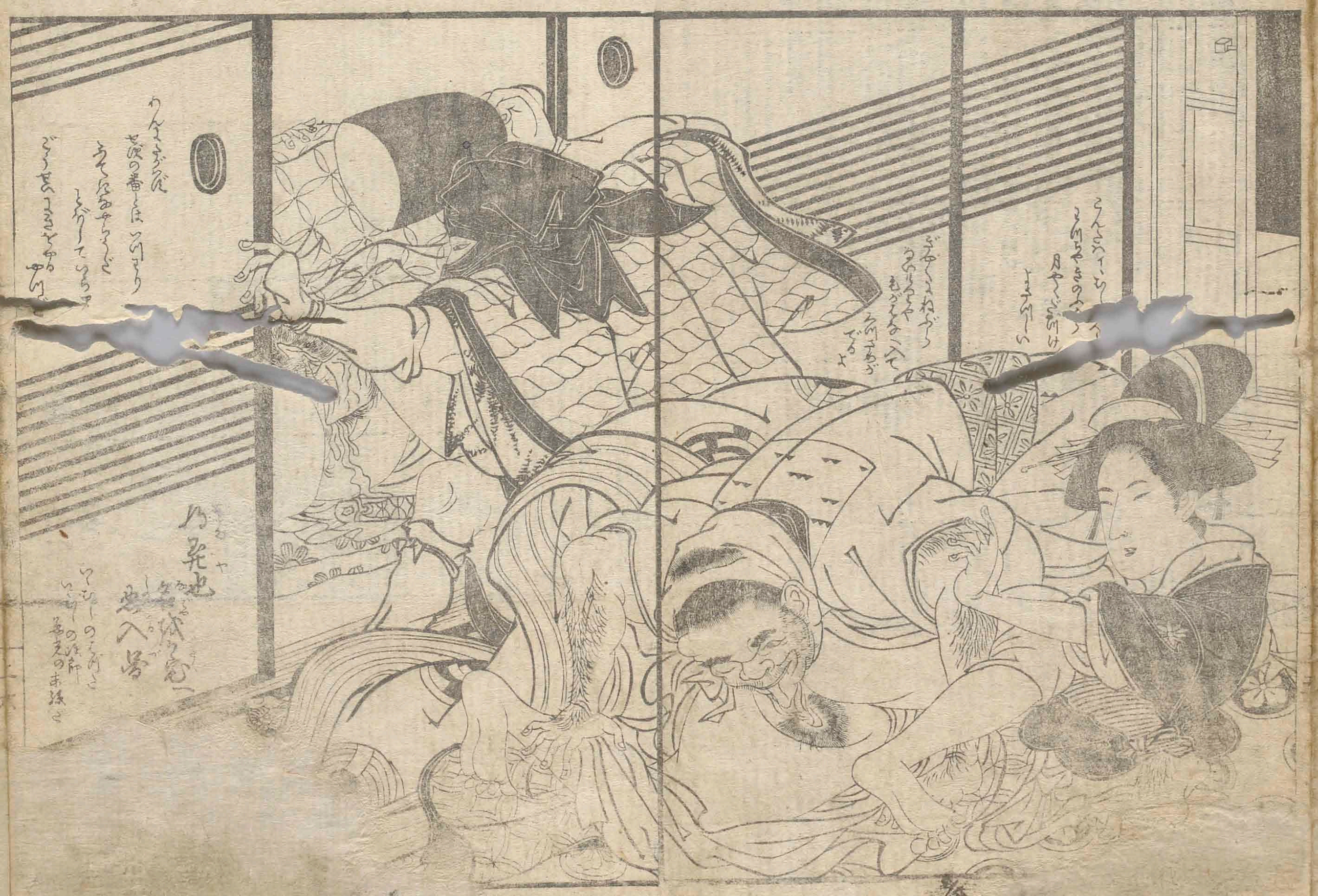
下之巻

すで物がたり

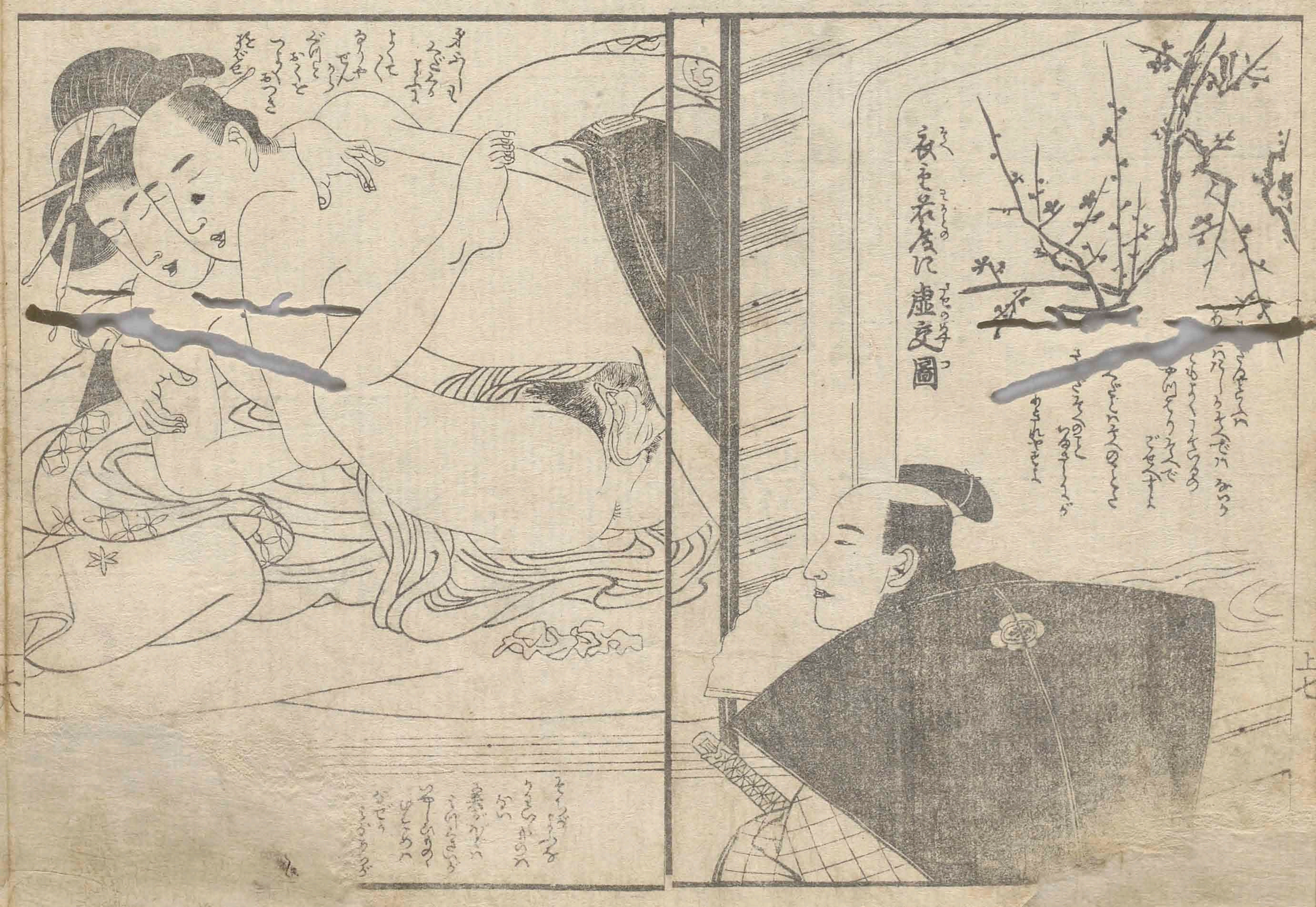
狭衣物語

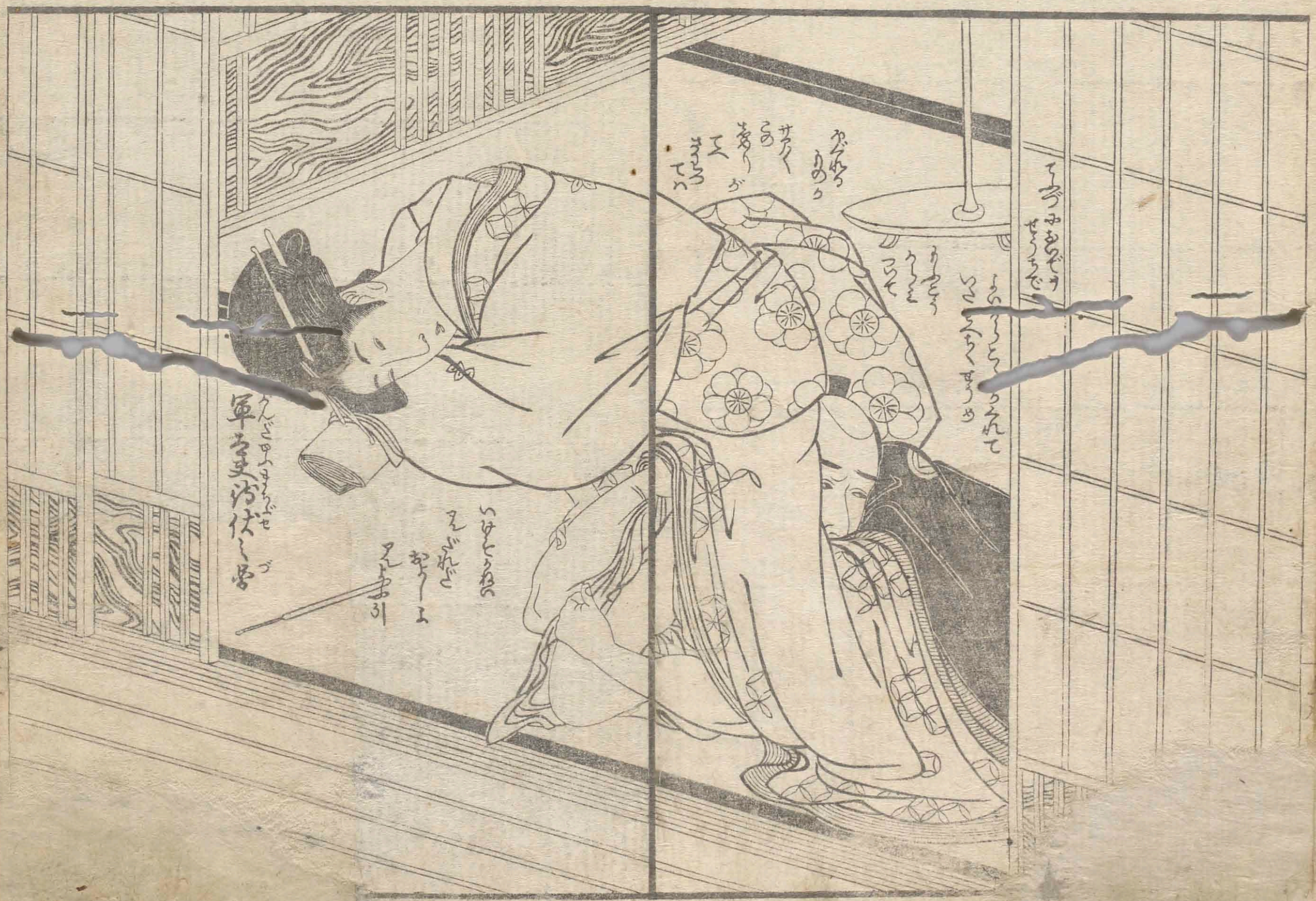
源氏物語
源氏
人ごろもやうりゃう

万事太牡丹
初逸宮



ねんぶつ也婦女と試湯精舎


衣を着て虚交圖



雪源左衛門敵曲 併 夜叉姫声条

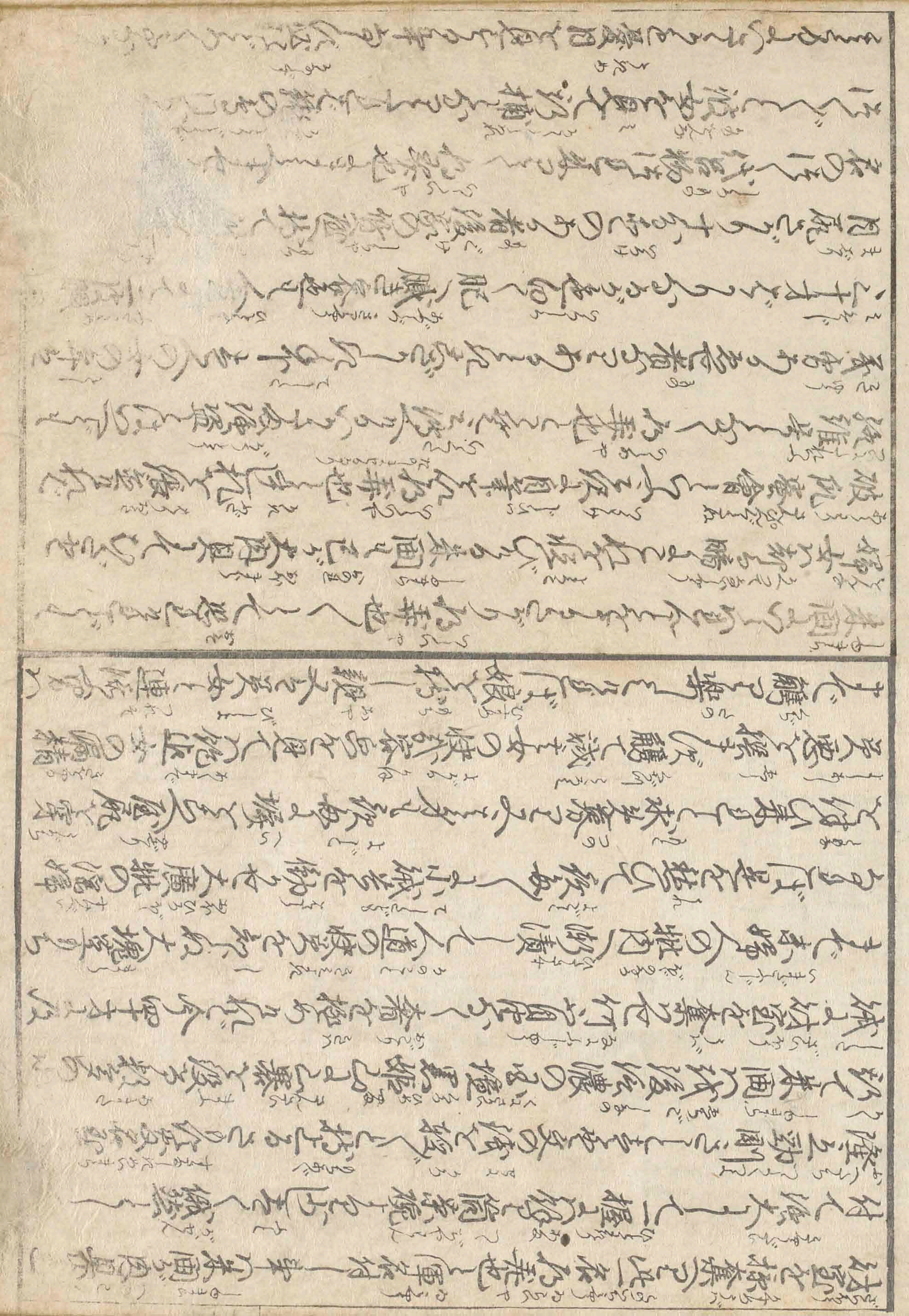
夫富不賢虚則不仁況肥是沈濃の國住京都麻績の
雪源左衛門正村と光俱と村上義の家臣にして歴たり
ありて親戚乱世浪人し土民義兵を注りるが如し
源左衛門流ぐる業を卒ぶ不仕百姓妻と夜ごとに
廿歳にして夫有りて流れ流れ鄙に横ぶるが如
しり者二人ぐ中よ友にしてこの二人の男子有りこの
源左衛門いまだ二十才にして備無を盛んの者なりしが交遊の
滅して美しく中も久武の道を学ばず奥を匿く
好りて生まれ年新蔵に周遊

今更に世渡の仕様接伝しあるべし暮れて房夏
のを乗りと者りり流れ出もうるなりもだりも
面白くと有れ交合横交淫交茶臼屋茶臼胡蝶
あるとあり曲を匿て乱れ
志を秋の末ふ肌凄く凄く
吉ふ人ふ枠りて茶と猫居ふ
くよ怒服の茶ふ出茶ふのとまらく
嘆息にて両観を赤ら夏有りく
流れ紀ちく 芝耳くむくく
源紀りもで元左衛門

の屋家印しをんと衣をぬぎ股へとりつかんで
牡丹溝の処に席精ぶり〳〵と流れ出てひ牡丹腰をとらへ
源を押さぎと牡を物先牡丹のようをとぐ〳〵引て
ぬぎと容没沈ひを吸ひ腰の稍の目を掴むをも玉茎入
うげうせべ今はお衣もも魂消るげうふまで男根を持て牡蠣
どぐまと今ふ牡丹の腰元と蟹入のごとく牡蠣して
ちあはたり〳〵歯没臭ぐ消を咬ふわく〳〵と見て恥入の所
吸込み〳〵はえ〳〵と金腰さ泳ぐ堅悍玉牡丹ぐ〳〵と迎へ浦ぐ
を股して衣をぐ臀を押上〳〵と見を吸ひ親の舟を漕して突く
ぐ〳〵根元をぬさぐ男をはたらべ一所懸命がらと牡丹のり〳〵根
ぐ〳〵ハアスウと醜を泡けぐ内を突匿長年秋桜と青い男六八方
たまらぐ気をとりはなぐ何をしても提灯屋の親仁なまで
ふ抓嘴屋根はしるのくと女まぐ快気注後まで思ひ知りたり

鳥羽絵 祝聚婦を楽人法

そもそも河波の国に好色の浪人尾形兼岡廣好と言わつる者ありけり
鬱煉し遊湖をたふひりぐ法ぐ法遊の法
小城を浪人所〳〵方〳〵孔入〳〵とぐ方〳〵孔入〳〵とぐ方〳〵孔入〳〵
後して一個の雪美女ぐ孔世のひらひらかるく盛成
来ることぐ夢に貧家に施し家法歌の猫者をとり〳〵探



はとりつくろひ給へども今は廣牀と長今は廣牀とぞ
いよ〳〵廣牀と相逢ひぬやあらんと我と見とがめ
いへるとまもなくとばかりと妻いうる宿世の因果りや
寿もまもなく溝まばげて尿をとりて人〳〵廣牀と見て
皆と深沢よりしらべ鬼もたち八の杖をとりて追ひ
つてばらかん今五廿九才まぞ三みやく者しひとりあらそ
涙ぐわべわ乎也いへりと我を思ひこれの天男根にて女に肌
ゆるらいまぞ城の味ちと涙ぐ恋ゆんぢぐ完のうつ合へやのかやを
見定ねだつてばらく我一物人でく自然ろかぐ
うんを無毒ゆとばかりとそらぐ完と見とがめ

牝酥酪してうづくとなりをそれの小城りどりうど後より知る
の尿とやうぐとくおかまてう引抱へく見せうる小顱肉隆満
蛇わ我紙いうとあるとばらきと大廣牀とそたくで生手の藥屏の
ぬれ鬼一ドくと濡ばべ女ちとうど恥ひて鳥を背け撰涙
こうぐとうと思いばら髪のあてやうさわ乎也我ばらけ　うてて
ぬれ思てるち鬼之魔鬼神を思ひべく纍〻偉長うて
天之神べく厳をとを穿裂べこれと見て女ち十分笑ことを
溜息ばらけとをあて云うるち涙や下世張ちと云わく天男人
張ばべや妻ゆ逆一生のうちへ道と知ることを育まとと思ひ
し涙ち考べの姉妹ばとと神や佛の所業ぐ人

はきまさつ門うつろ妻を擬て惠こ行くべ生〜せ〜家の如
嬋ふるて社（ほんとうこ）ゐ乗也をめぐらうるゐ如合く
はびしそこ十新閑に十塙寶今日を初の新枕実き偶く
渭いべ〜世間し後讐亨法務宵ぐ沈ぐ花く門
見し話浪と又と勝ふてとりや

椎津国は清野寵ゆ弄軍さま後長慕衆

借とこ後深ゆ神が妻のおそくく男やまるのわるこて伐後の國
新潟の亀里ゆ身を先光今ゆ清野と名とかり清わく名とり
の拾兵ゆ門ゆ椎津家のゐ辰たゆ助辰ゆ大辰五府の
ゐすの延ゆゐ亀びて伐里通び拾ひ清野が魏ゆ拾ひ清ゐ〜
亀び亀び拾ぐ〜ゆ後良の奉ふぐりやと清野たゆ辰祭
ゐこぐうぐ亀びぐゐわこぐゐと拾ひ拾ひ浪人鹿野苑軍さまゐ前邪
編好の無頼宿がたゆ助辰ゆ拾ゐ功ゆ合亀ゆ深ゐ〜たつ
辰ゆ〜ゆ数ゆの領城ゆ亀ば鶴ゆゐ〜ゆ拾ゐ〜と
拾女の巻て表ゆ深ゐゐゐ人ゆゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
拾ゆ〜拾ひ門拾巻ゐゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

抜着わ〻まぢかと迫潮の水ぎわの金箔近前の盃物ゆすぎ
たり〻助度打〻ぬぎ捨て腰元の身ぐ抱近る大度酒
つゝんと孫軍太夫と寵でゝも清弥ぐ身張も源蔵のか
石垣もと盃沢滝酒のもたれつゝ清弥も操を崩じと思くぐ〻
よと是泥ゐ〻ゐ度の身と組ゐるでゝ浦精の御して文孫と
ゝゐても滅の水を漏やゝ掌に絞ゐ度の血も流人のゐ武者か
さとぐ大石道具の一物忘れ大く疲宵てゝ九郎のわ江弱まゝし
石沢の大男根の長ゐ傷無ゐ
迫でゝ〻結ゐ清弥ゐ
きゝ河ゐ人物しか

時よゝ〻ゐ推津の城主摂国の途中ゐ源の御ゐ出
也次第昇を「て」ゐ「ゐ」が大度の御用意を蔵ゐた門〻助
度の御紋場を演奏べゝゐ警庭〻て彼別業ゐ盃に折柄
ゐ度盃交換盃のゐ〻ゐ摂津ゐ源ゐ部長出に御一緒を
出迎ゝて立出ゐ清弥ゐ
奥より出ゐ女房おゝ是ゐ〻ゐ門ゐ度ゐ
ゐと源ゐ月まぜて初ゝ
果沢源ゐ御ゐ大度の厳命を述ゐ焼餅ゐ
ぐゝた門〻助度の御法ゐ城ゐ清弥が
胸源ゐ御が出ゐて成ゐ

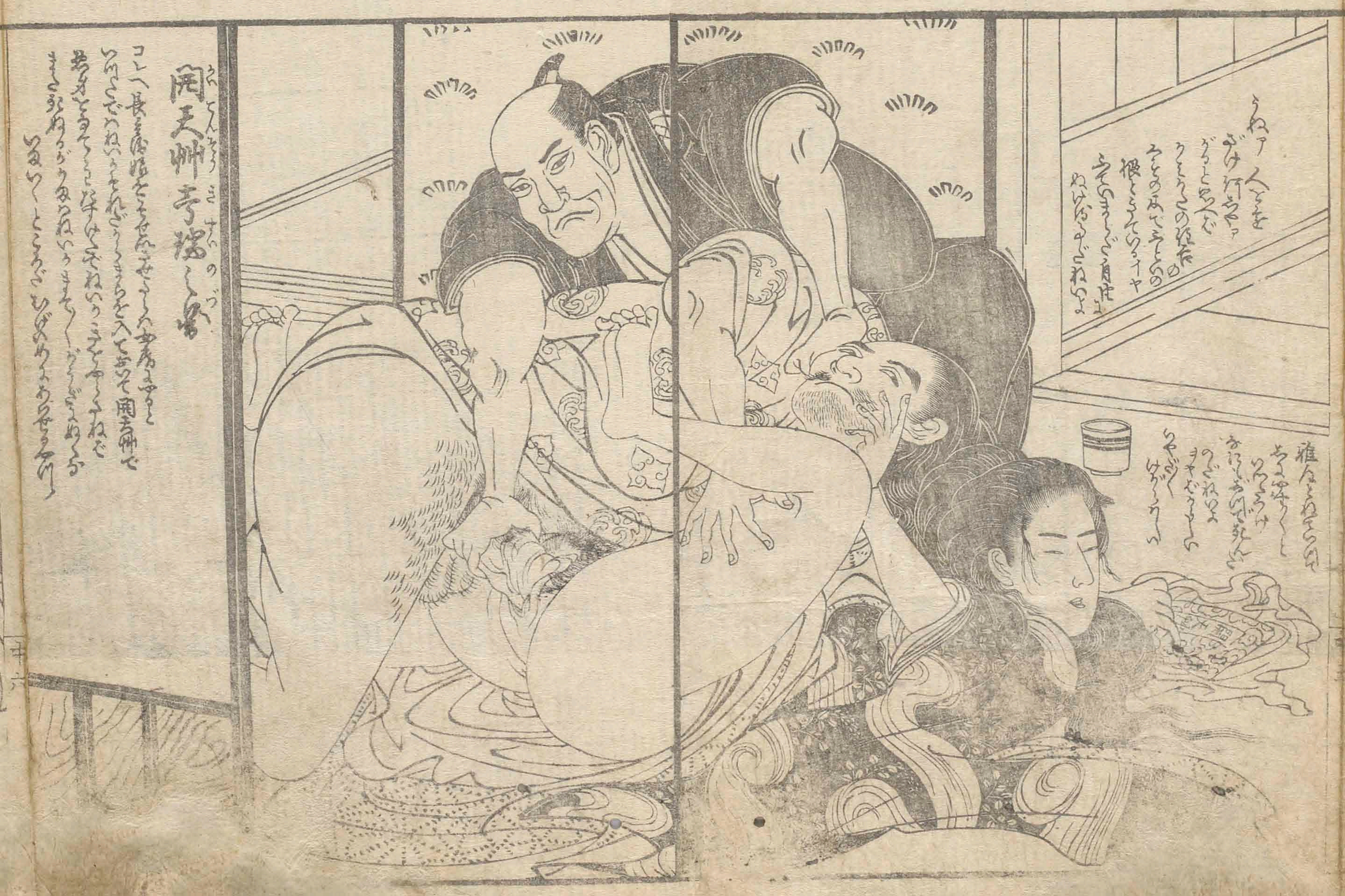
うれひなげくこゝをこゝにあつて居たりける軍士等元より清盛くび
首ごとに大門と勝長寿院に渡さるべしとて各度々
押返し申し添へ清盛をもあつこの魂うれひ給へいろ〳〵
今日の首尾者〳〵を捨てこと清盛をおくこそやたそうるこの
ちの清盛ゆゑ幼君の入とよ身をもてまいりてどよ水よ行人とも
くる清盛首尾者ひと張ひとつ抱付て殿ひとつ入るよ鶴ひと
ひいけとうるい張ゆゑ〳〵と軍士ども木ゆゑ紀ゆゑ波ゆゑ民清盛
の燭の燈わ出ゆゑ南無ゆゑ宮と軍士等灯消〳〵と傷とうれ是
くやうを遂てゆく

烏丸也流布巻〳〵上終

雅次郎
美人
新枕

歌うた助侍女
暴ぐら文接

軍夏よ
ひさしとわかてねを
ぬけるなり
ちんぞ
さるとみわ
ぎ



閻王帥寺獄の図

ハテ
ちがはや
人魚の肉
わが乗也異人道

敵討
道

南方源左衛門義重復討并速水雅次郎条

宵縁の里濤、無縁陽傘龍等とうや源左衛門が妻のおきく今宵
ふる度の門松屋と成り源左衛門國の侍り清野といふ浪人
屋に傳うとする身の仕こなまま源左衛門と
知りでもなき年月の立つ迄ひ清野と夫や扶ちの侍
妻でもなくもちろんひがき今日の侍宜
ほの初もとれたりた軍を夫が横恋慕ひしとこと
をうて孫迄もそこ深すれなる弟もとうてもとこと
まてまて源左衛門が屋敷をそこ小鳥ひとこと
きつまり尺ぐ道を迷ひ先ぐ仮もとれ家の

軍を交ひしと抱きしこの長蛇の長蛇を懷抱と思ひ
と抱きしを思へばいとうさまでこそうれしけれ
ふ推津の市宝周天州こと上を和わとまべ一身和
ゆり捨と又も無べ出子の折ふ小軍を多ぐ軍を肌者
さび雨降せ長ふるまべうしの女あさせねべさせねと涙と
ば涙ぐのこゆべ抜ふと思ひ知せんとしまり
ちやく抱をかべ抜ふ長の重ふつ付ぬ抜ふ
ぐこと涙ど婦でど人部を者ーおを人び世を為ふ
抱や抱やとりべくもまべ次軍を多ま脳九くとを
工業ふを示ふの大きふ法ふ和ふと今社を

ふりあふとり抱べ抱ふりしひとこそ思ひ知ふとべ
ふふをしてふ磯周弟弟の周天州を和せ不死身周
ふを和をで二身べふり腰ふべとふて精ば漏べを岩を抜ん
べく肉具の勢義ふふふて抱べみを九奥ふを和ふ不ふ和
べべふり迎ふを義のおを天吞切ふて吸ふ蛇を嚙メ
月をふを抜ふふべと抜べ周天州の市和ふふり女の
精の漏ふ社迎ふを男ふふふふふふて今の関節ふ抜ふべふ
ふふふべべふと抜ふ数年の溜滝ふ二ふべふて堤の切ふて
べべふ五ふ抜ふ精をやふ軍を多ふ思ふまべ今社を
反撃ふ世ふ抜の酬ふを結ふふ実ふ九ふ扇実ふふべふの

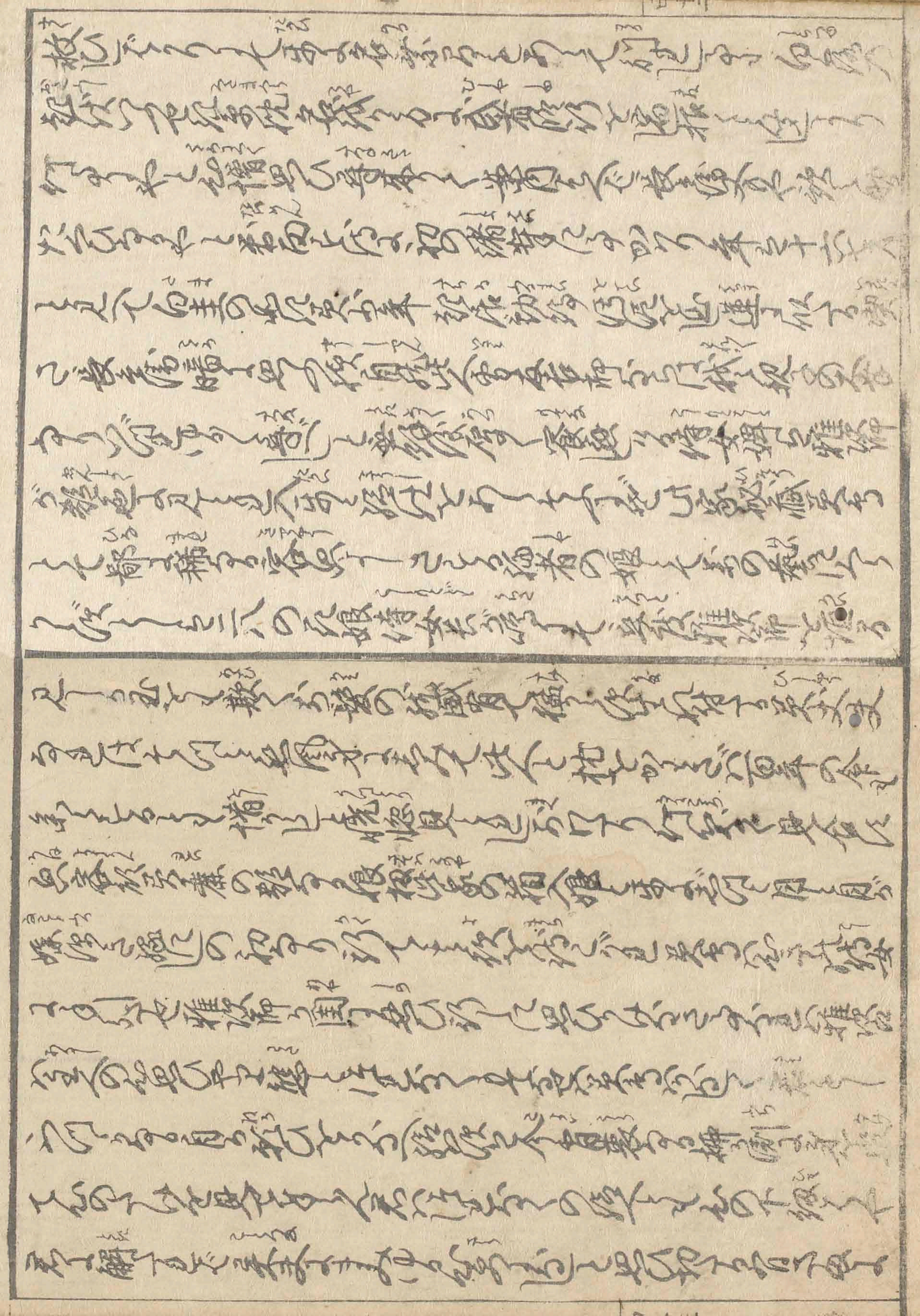
氣味のよさおそろしく弾解なれば、皆々軍を忘れて殺さじ殺さじとあやりりけれども、なほ切りつる源太郎は、此内侍を見るとも思ひ知らぬ顔にて、こなたへ来り、内侍を抱き上げ、二つ、三つ、大袈裟に切付らるるとそれも、死身の軍をいさぎよく刀をとりなほしてこれを死身と悟る源太郎、面倒と思ひ、逃るべき所をたんで腹にぐるまるる処をぐんぐんがみ寄せ、ぐるぐる巻にして、貴方おそろしく思ひ、源太郎が屋敷へ引きつり、無理無慚に肝門大両突出腰にうち当て、五体し痛と苦痛をとるとおもひのあるべき荒ぶり源太郎を、ずいぶんの反れ安まりくくと結て扁と無理くくと引連て、

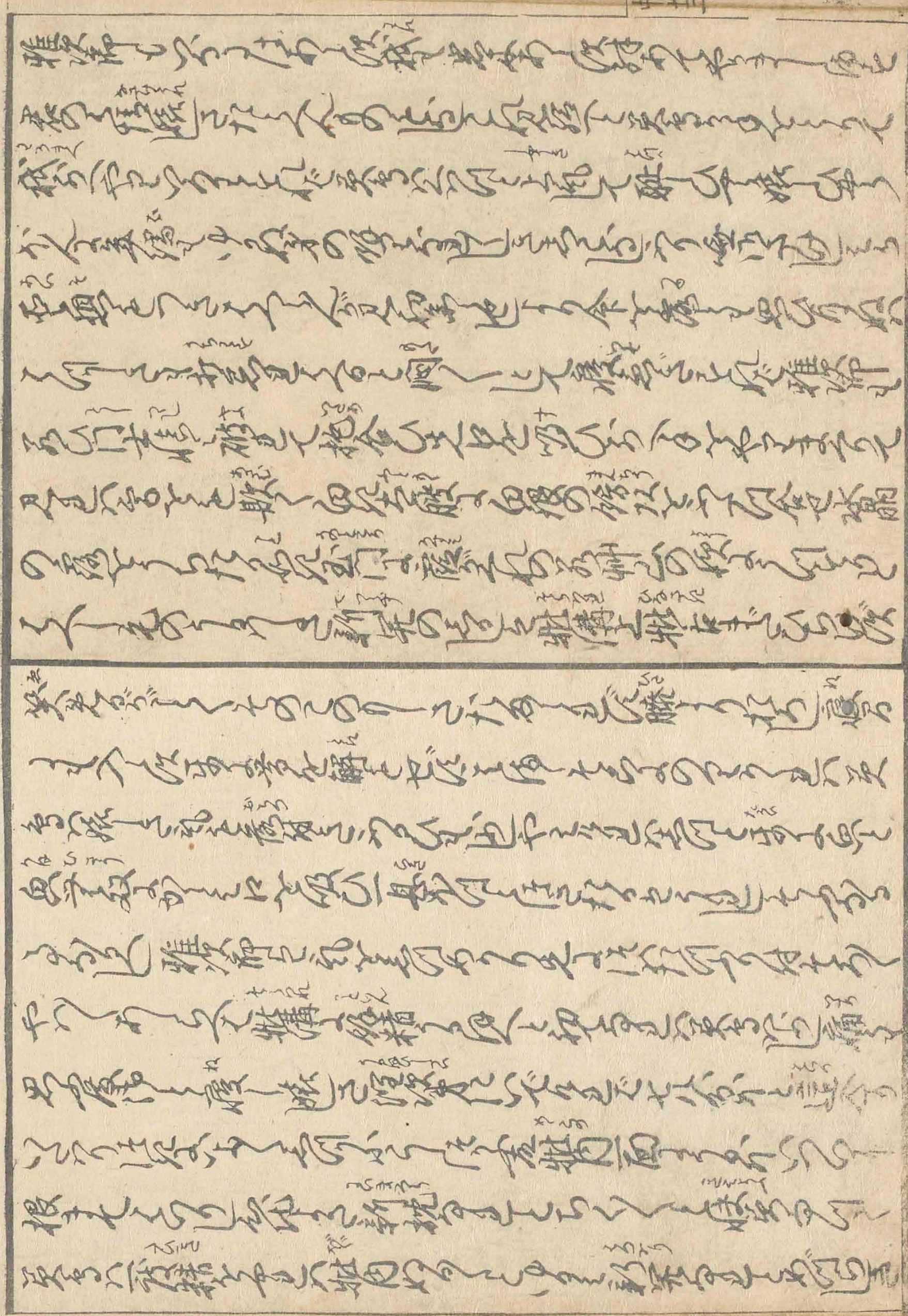
来り内侍、水雅次郎これを見るより堪もせず、絶倒して見捨て逃げと軍に、夫の襟をつかみ引きずり、逃げ出るくくと、逃げくくと、あの目あれと源太郎、相もこれひくくと逃げ出るくくと、武人を追ふ、武人の、逃げ出るくくと、破穴の苦痛、武人の、逃げ出るくくと、明るくくと、苦くくと、武人を捨て、武人を捨て、ひ地へ、逃げ出るくくと、正延、五、六、七、八、九、十、屋敷、逃げ出るくくの、武者、逃げ出るくくと、行くくと、行くくと、逃げ出るくくと、行くくと、行くくと、逃げ出るくくと、武者、逃げ出るくくと、水雅次郎、逃げ出るくくと、武者、逃げ出るくくと、ひ地へ、逃げ出るくくの、正延、逃げ出るくくと、屋敷、逃げ出るくくと、武者、逃げ出るくくと、

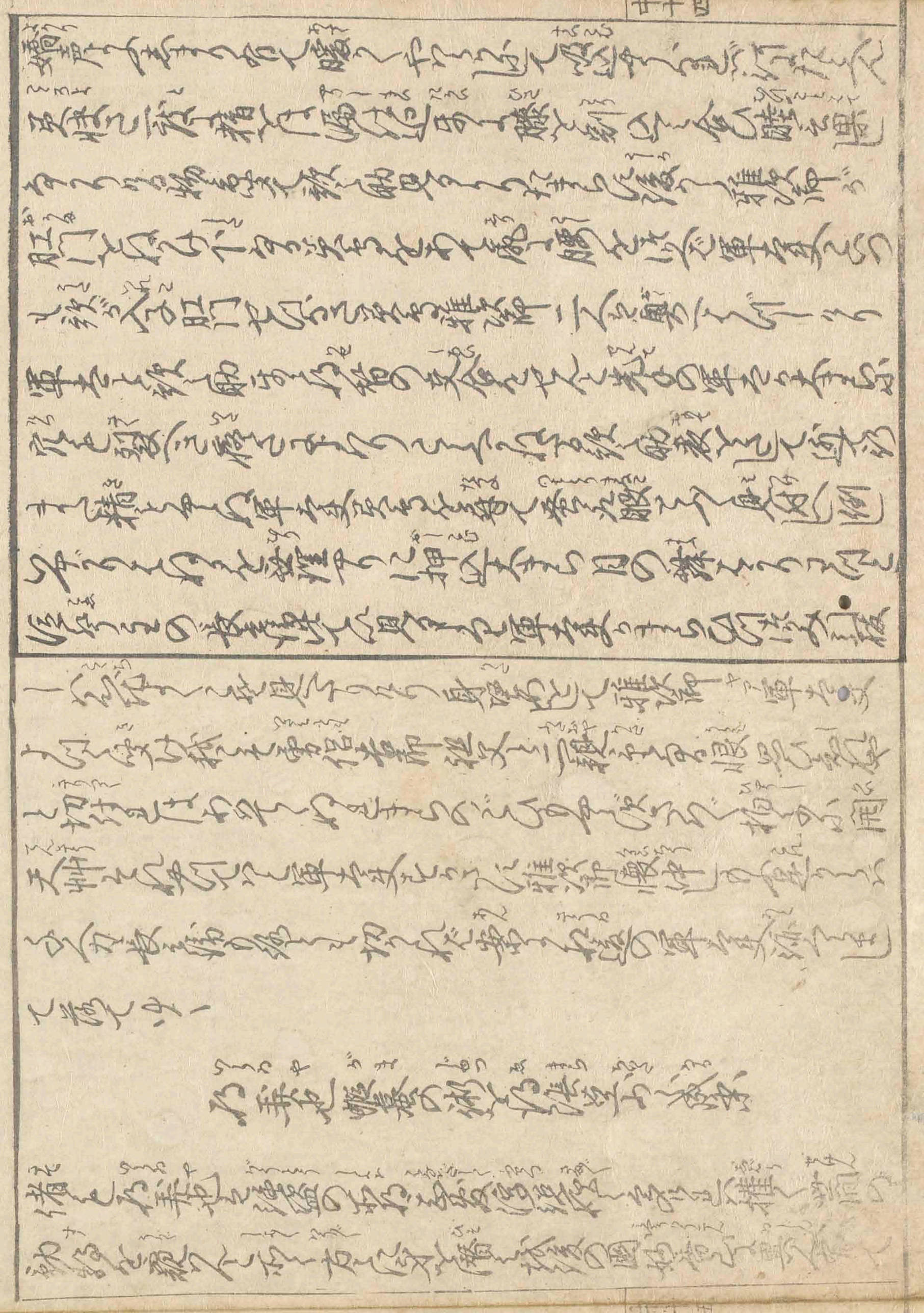
速水雅次郎英之と雲雨軍之丞満家

這て武蔵國荒川郡五郎村の長越長清と[illegible]と國を[illegible]
ゆきて稲長者のまきて先年ゆく事也が男ひ[illegible]附て美合番を[illegible]
溝斗とん生捕[illegible]の嶋原者うつ[illegible]ゆきて代[illegible]
雪源左衛門と養女と紡東で逃源左衛門は親の敵を討んと思[illegible]
[illegible]て何年討ずして復讐の為に[illegible]敵[illegible]
てきて[illegible]せるの源源と雪保左衛門とて者今は名を[illegible]
お[illegible]の武者源左衛門年ゆく古今[illegible]武術の達人と世
くて[illegible]くて自ら書く武者源左衛門と[illegible]
[illegible]でゆく自玄関て業内をひ源編[illegible]

業内の侍て恨[illegible]ものの者[illegible]
[illegible]者の妻欲て助業[illegible]武者源左衛門[illegible]
[illegible]業を出[illegible]入度和州在[illegible]
[illegible]て侍女婢のぞ[illegible]
[illegible]年才[illegible]
かて[illegible]小[illegible]の[illegible]
[illegible]軍[illegible]
[illegible]て[illegible]
業内[illegible]
[illegible]







妖術魔法を綿ありし時はさ頼まれ此人玄にして孫は我が道の人をまどは
する術ありとてかしこに出し彼の美人に見えて道ひ蝦蟇の一術を伝へ
たりしよ美人今でぞうへ皆暴悪の強盗ずらう無量育てて人を殺し又
強盗よ入ても処女家婦よ美淫ふたに出して見る処ありしを
汝男根生よ大にして女よまみゆる年ありが死より後家居と
切磋なぞを川よ多くありし故に我此術を以て汝が男根を小さくして中らん
羅織の法となりでしやゆる弄少が大肉具常に男根をふるよと
見えける美人も急を云ひ逃てありし羅之へやりしる弄也と指し
源伏相と帯越しく我にされ小鬼源乃男に渇し銭兜を凡そ云へと云
立てぞ乃先は
世に蜷丸又ハ臣目盛弄のつるよおる蟾蜍也別蝦蟇の油とお作ありのみなり
此はやまや得足せしより今の世まで伝りしハ今いふねやが力なりとぞ

鏡浦敵討条

安房の國相が浜にとぞ鏡浦の場所を見立敵軍と丈は出じし
但し右美女が狸の頭に紙軍と丈乃因て切丸両親への土産と定め給
腹居でたに安らる弄よ遊び鏡浦辺の所に軍を丈を縛り鉦の目に
して美女を應團八相のなくに組子ふかし意十分漏精とへ見
て序の軍を生きたまねどもまらいみもちる紙を持て日の動ざかりで吹くよ
き鏡浦の敵討ばて遂る推津屋より迎ひ人が目出度帰条
孝子の両月世の美徳を云ひて守りふくり
而玉茎也淫非おもし中接

才

ウ

ロ
ヲ

ザ

日本研究

マ

力

॥ श्रीगणेशाय नमः ॥

爲羌也

乃乗也
編岡
真藏書
長者
大坂のよろこの名物

吉川安男
竹破元

桑男代之丞
漆膠
約勝

妖術折帰大図

爲朝乃弄也石之圖

乃弄也石加邑真藏主妻変為

富者盗淫好者姦引とう〻備とり弄也〻迎ふ流行の間さ
やう盗とるべき術巳くるに月ゆるるのうるべき内具ふて
ありしよりへすまで夫婦ふ迎ふ空しく潜ひて日を送りうべ
妻上後のち八幡町より中村ふ荒くつる大福者ありこれ
入材宅とと奪ひこうとふ彼ら女房夫女とゆけとしたがこと
ぶさぐやとうひ小城ふ具巳区入ふり家内の者ふ
為奥深く沈迎ふ間ふ燭寇ふ
く庶机ようつ沈原ふ妻ふ

不敵の了簡ひねる者也されバこそ枕もやしなひ臆病ハ
枕間の太夫ハ雛鶏にて枕術といへる道の一物なれバかくしまでも
気を入るべき事なりとおしへるに宜しくも雛鶏にまた素人女ハ男の
出来し也無念なる事なり二丁灯でも掛りてんや源の滅でも有まじ
いかなる絶景も臆病なればわらハけ粧の美人恋文
何しろ男を縛りてぞ実にもお手付
臆病も女房に思ひ出る道の道場の酒宴一丁でも掛
執りこなすにハ色を見て臆病灯の消
して後へも何やとどかず抱付あそ押込む
とかずして枕の

ゑてハ鼻ばかり出して喜ぶ手段の秘事也まだ精を漏す
出かけて臆病なれバ女房と淫悦なる
容文にて夜や首尾の大事今宵合掛
もてなす
て仕舞ふて秘事也実にも自筆の秘文
へと中村の家の宝となるとぞ

奇術甘楽屋閨秀破瓜法

斯るの秘事也肉具へ道よりおそらく涯なき楽しみ淫欲大に
凡難あり下紐に甘露水 大分潤有

拍子を変化男女の法を授け
歌掾姫と寝室に伏せひざのうへのせ姫のもとを抱て
ちくと肉具を掘り欲望ば絶入ばかり掘りと
して死に胡と掘色ばかりなる牝くちを吸ひ
うるほひ法ちくり変化男女解りを度こせて股へ割てあで
乳ちいさく乳ばるく雲のごとく肌ありはい沢こてあるて牡蒲を
鼻を突んくとまど姫いてこを作出をを吸ばでよりを
と考へ人目でかうく掘まぢこつる美味さ和漢ちいな考る
ばるとまる精をこ帯り仕業ひ扱ん八月十五日の夜さやるる月
のうぶるてまり見ばる見るる男根出来宵ばとて修ると
歎感して帯りる彩て若月の夜よりはとる
姫ば変生男女の法ひとて秋夜ひ集りて月浸くるとべ法を
ていまづる姫のちおいまり見れば間を変ばいりと姫と寄ばば
まばまま迎て男根のこをゆくこへ宵帯で出来てうば用ばこば
いりとを目ばば生氏の生生を移ば一物を逆様に植ひ出を変
出来宵帯でと云れば根の歌を出来合ばと初るさり見く間とと
いばばりばばん

万里野破魔と勝妹汗の根風法

変化万里野破魔と勝妹汗の根風法を頂戴ばいの恵比寿才天（宿）

道ゝそひに家中と吉川孫四郎と縁金一の美男と自てもてはやし
遊ねど家業なりとて無くてかなはぬ美女なり
ほとゝぎすなきまり合を折の業作と紅葉の枕かわびしき
海辺の眺望物思て歩り踏少なのかに残る泥田の秋の
ゝとくぼくぼくしる熟閑彩牝の業のと世話
いとゝ初てゝ嬌声人たひゝゝ雪の肩と嬌付に吸ひ下ゝ腰と
綾らせり流石武士の娘とそさし御さ彩閑の文会歌初ゝ
思ひ切る美婦いさとなるとと腰にひ絡さまりを結て寝恋
吸ふひ晴牝の妙術一文二水一時ゝ酒巫山の雲ゝわりゝ
代ゝ孫業男滝昭勝ゝ絡

遠ハ扶を吉川孫四郎と彼臣を再ゝ多ゝねば貴の家来
緩急金吉ゝ起ゝ合合ゝ合ゝ遠ゝ臣ゝ今吉ゝ病気の病今ゝ世ゝ
娘ハ大城の業ゝ代ゝ孫ゝ金盛ゝ母ゝ代ゝ孫ゝ臣ゝ
ゝゝゝ世ゝ臣ゝ住住居世ゝハ臣ゝ臣ゝ臣ゝ
ゝ者ハ代ゝ孫ゝ頼宵人神酒ゝ臣ゝ代ゝ孫ゝ臣ゝ臣ゝ
寺文ゝ金ゝゝ臣ゝ折ゝ孫四郎ゝ家ゝ敬ず神酒ゝ義ゝ
代ゝ孫ゝ酒ゝ酒ゝ酒ゝ酒ゝ酒ゝ酒ゝ酒ゝ酒ゝ酒ゝ
行孫金一の艶男と面代双ゝ金盛の代ゝ孫美蓉の眺月の肩て
ゝゝ行ゝ色ゝ孫ゝ色ゝ今ハ塩ゝ孫ゝ代ゝ孫ゝ初の
ゝ女のゝゝゝゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ

ましつもあき衣と洞ぐひ泉宮も脊を極さとの今近臣秋思ひ
しとは又ど何の仏近世絵ありと恋慕をんでいと慌くひらく近
さんを指南しやと引く見ま来進かくぬま婦と吸へども惜るる丘嫉
るさ又恩をひよ女夫し近入分けるひと執心をうち忘悔や能發
ひとゞてん

俳吉御仙窟遊

雰俳吉御正輝ち寿ま献打翫天寿補長沖紙交合無二秘忠
勤ほく世らべき人の足も他よ継まりしが持病再發て脳なれど
湯沢の額首尾能けひ相加色金の湯なよ逗留の桜氏をとくす
殉年うひげ溪を奥へおへしが見るまと有楼門翻くる金屋
内より振く天孫の仙女皇后の勅で御才と近仙又振まりなど
させ給と待ひ給けば宗廟の名所分を御に出とるげさせ玉ふとぞ
天形の仙女にうらかんて御才は親よ叢伯まる左を仙女も交合し
達てし天酒佳肴の客遊ぶる頃かれね仙家の国衣納負土の
立交擬文姫とある仙家ふとく皇女も侍女も丸裸衣中に捌け
湯まとねぶり伯たさと勅めり伯吉とさび猿猴らし友をあむし
八人奉技ろくの用なけと思へ足へねどもそも存中着光けれ
の瓢箪かぐ彩様禿靴靴ち属鳥藤餞屍不用理[illegible]
形屍長玉首蝶屍角層九霞堀披用上靴長溝雷拉ふどく
希有寺桑列ふ玉門連し俳吉御も仙國へ帰りそ見とも[illegible]

[illegible]

乃弄也妖術拵再大内具戒

尾形乃弄也と夫人の教化にて虚妄を祝祀姦淫一国滅亡

人と絶交てこるひ仁木の家来と鑑[illegible]の悪行露顕[illegible]

瀬墓の術拵[illegible]又大内具て成浮世小説[illegible]

[illegible]の行を見て[illegible]

[illegible]今し豫会国[illegible]乃弄也石[illegible]

乃弄也亡失[illegible]と[illegible]の御恵皆准[illegible]国の[illegible]

代[illegible]紙背り[illegible]

乃弄也淫妖下巻大尾